

(活用表をもとにした授業改善)

# 児童の思考や授業の流れが分かる板書

多治見市立小泉小学校  
坂野晃規

## 1 授業改善の視点

児童の思考の流れに沿って構造的に板書をする。

## 2 具体的な実践

### (1) 既習事項とのかかわりを持たせた課題作り

#### 1. 分かっていることと分からないことの明確化

算数科の学習では、問題解決を図るにはまず、問題の内容を整理して理解する必要がある。そのためには、問題の中にある数量で、分かっているものはないのか、そして、聞かれていること(問題)は何かを明確にする必要がある。

#### 2. 既習事項との違いを明確にした課題作り

算数科の学習は、既習内容を踏まえて新しい考えを広げていく必要がある。そのために、漸次までに学習した内容と本時間かかれていることの違いを明確にし、その違いから課題化を図り、本時身につけなければならない知識や技能を明らかにする必要がある。

### (2) 課題と関連をもたせたまとめ作り

#### 1. 問題解決的な課題の設定

本時身につけたい知識や技能に焦点を絞って考えを深めていくためには、「〇〇をしよう」等の行動の目標ではなく、「〇〇するにはどのようにすればよいか」や「〇〇はどのように計算すればよいのだろうか」本時において考えなくてはならない点を課題として明記することが大切である。

## 2. 児童の多様な考えの中にある共通性

児童は一つの課題に対して多様な算数的な考え方や表や図、式や言葉などいろいろな表現をする。それらの中に共通性を見つけ一般化する必要がある。(同じ数字がどこにあるか、同じ演算がどこに表されているかなど)それらを一般化したものをまとめることで、本時身につけなければならないことを児童一人一人が自覚できるようになる。

## 3. 課題に対するまとめ

まとめは課題に対するものにするので授業に一貫性がみられるようになる。

「〇〇の時にはどのような計算をするとよいだろうか。」といった課題に対しては、「〇〇の時には割り算をすればよい。」や「〇〇の時には●から先に計算をする。」などといった内容のまとめになる。

## 4. 本時身につけた学習内容の活用場の位置付け

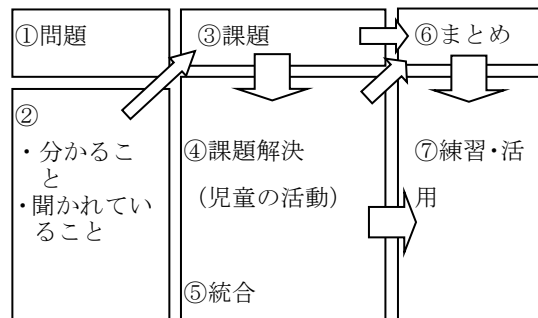
本時学習した内容を、しっかりと定着させたり、活用場を広げたりする必要がある。そのために、いろいろな数字や状況を変えた練習問題を行う。

### (3) 児童の思考の流れに沿った構造的な板書作り

#### 1. 1時間の学習の流れと児童の思考の変化

これまでの内容を全体の流れと児童の思考の変化を対応させると次のようになると考えられる。

授業の流れ	児童の思考の変化
①出題	①内容把握
②分かること 分からないこと (聞かれていること)	②内容の整理 ・既習との違い ・使えるもの ・使える考え方
③課題化	③本時できる必要のあること
④課題解決	④多様な数学的な考え方
⑤統合	⑤他の考え方との比較
⑥まとめ	⑥本時身につけたこと
⑦練習・活用	⑦他の条件での活用



【図1 板書のモデル】

## 2. 児童の思考の流れに沿った板書表現

板書計画を立てるときには、図1のように、児童の思考の流れに沿って、黒板に流れをつくる。また、それぞれの部分を、明確に役割分担をしておく。

そして、毎時間同じように板書をすることで児童が学習の展開を視覚的に理解しやすくなる。

「課題を見つける場」

「課題を解決する場」

「課題をまとめ・活用する場」の段階に分けて黒板を縦に三分割して視覚化する。

そして、その三分割で分けた物について

「課題を見つける場」は、問題把握と既習内容とのつながりを考える場から課題を見つける。

「課題解決の場」では、課題とじどうの活動や発言内容を児童が書いたり、教師が児童の言葉をもとにして板書を行ったりする。

「まとめ・活用の場」では、本時の学習内容をまとめ、活用する練習問題を板書するようにする。

図2は、実際の板書である。



【図2 実際の板書】

## 3 実践を振り返って考えられること

算数科は既習内容とのかかわりが非常に重要である。既習内容と本時との違いを明らかにし、そこに焦点を当てて学習に取り組むことで1時間の学習を終えた後で黒板を見返したときにどの児童も本時学んだことが一目で分かり、本時できるようになったことが一目で分かる必要がある。そして、そのできるようになったことを成長としてとらえることができる。